

日本現存支那鐘銘集成稿補遺

社会科教育講座東洋史研究室 石田 肇

一

筆者は拙稿「日本現存支那鐘研究序説」(『梵鐘』創刊号、平成六年十一月)で、日本に現存する支那鐘すなわち中国で鑄造された梵鐘に関わる日本での研究史ならびに研究上の問題点について述べ、当時知り得た四十三口の支那鐘の一覧表を示した。ついで「日本現存支那鐘銘集成稿(上)」(『群馬大学教育学部紀要』人文・社会科学編第四四巻、平成七年三月)、「同(中)」(『同』人文・社会科学編第四五巻、平成八年三月)、「同(下)」(『同』人文・社会科学編第四六巻、平成九年三月)ではその後の知見もふまえて鐘銘の集成稿を報告した。小稿はこれらに続く補遺である。

また拙稿「日本現存支那鐘将来の経緯―日中近代交渉史の一面―」(『社会文化史学』第三七号、平成九年八月)では支那鐘将来の経緯を分析し、(日本現存支那鐘一覧(一)有紀年)は【一】番〜【三五】番を、(日本現存支那鐘一覧(二)無紀年)は【五一】番〜【五三】番を、(日本現存支那鐘一覧(三)部分)は【六一】番を、(現在所在不明鐘)は【七一】番〜【七四】番を、(戦時供出鐘)は【八一】番を、(佚亡鐘)は【九一】番〜【九二】番の計四十六口を分類した。

これら報告を発表してから既に十年以上たち、この間に日本の支那

鐘についての新たな知見を得、また支那鐘研究に関わる新しい動向も見られたので、まずは研究動向について記し、ついで補遺を報告することにしたい。

二

日本での梵鐘研究は坪井良平や加藤諄ら先達ののち、多くの研究者があらわれるとともに、従来の歴史史料として、あるいは文字資料として鐘銘を取りあげる研究方向、また工芸品として取りあげる以外に、音響学、鑄造学など、多方面から梵鐘を分析するようになってきた。

このような動向にあつて、日本古鐘研究会は会誌『梵鐘』を二十号まで刊行^①し、また鑄造遺跡研究会は梵鐘の鑄造遺跡をとりあげ、梵鐘を鑄造学の視点から分析しており、これら学会の果たした役割は大きいと評価しえよう。一方、立正大学博物館には撫石庵コレクションが蔵され、この中には支那鐘をはじめとする梵音具も多くあり、今後、この博物館は日本での梵鐘研究の中心的役割を果たすことが期待されている。

梵鐘研究は日本国内だけでなく、大韓民国や中華人民共和国などでも進展し、これら国々の研究者との研究交流が進むようになってきた。

そこで支那鐘を中心に近年のこのような研究動向の一端を見ておくことにする。

まずは研究交流をあげると、平成十六年（二〇〇四）四月に北京市文物局と大鐘寺古鐘博物館の共催で北京シンポジウム「東アジア梵鐘文化研究会」が開催され、筆者も出席を要請されたが学期はじめのため参加できなかった。日・中・韓三国の研究者が参加し、この研究会については神崎勝「東アジア梵鐘文化研究会参加報告」（『铸造遺跡研究資料2004』、铸造遺跡研究会。『梵鐘』第十七号に再録、平成十六年十月。）に詳しい。

同年十月から十一月にかけて奈良県の飛鳥資料館で特別展示「古代の梵鐘」が開催され、図録『古代の梵鐘』が刊行された。この展示を記念して十一月五日には榎原ロイヤルホテルで国際シンポジウム「東アジアの梵鐘」が開催され、支那鐘に関して大鐘寺古鐘博物館の全錦雲氏が「中国古鐘の歴史」という講演をされた。杉山洋「古代の梵鐘」と国際シンポジウム「東アジアの梵鐘」（『铸造遺跡研究資料2005』、铸造遺跡研究会。『梵鐘』第十九号に再録、平成十八年十月。）に詳しい。また湯川紅美「梵鐘研究の現状と課題―国際シンポジウム「東アジアの梵鐘」に参加して―」（『史叢』七一・七二合併号、平成十七年三月。『梵鐘』第十九号に再録。）がある。

平成十六年に中華人民共和国と日本で国際学会が開催されたのだが、翌年の九月、主に大鐘寺古鐘博物館が中心となって北京の和敬府賓館で第一回北京国際古鐘文化交流シンポジウム（首届北京国際古鐘文化交流研討会）が開催された。この時期、大鐘寺古鐘博物館では「フランスの鐘鈴藝術とフランスの歴史展」が開催されており、これにあわせてフランス、ベルギー、日本、韓国、オーストラリアそして中国人民共和国の研究者が参加するという盛大なシンポジウムであった。支那鐘全般に関わる発表としては杉山洋「古代梵鐘の日中比較―東アジア三国の梵鐘世界―」と全錦雲「中国古鐘の起源と変遷」があった。

シンポジウムの内容はこのシンポジウムの組委會編になる二五〇頁という厚さの『首届北京国際古鐘文化交流研討会資料匯編』で知ることが出来る。また五十川伸矢「第一回北京古鐘文化交流シンポジウム」（『铸造遺跡研究資料2005』。『梵鐘』第十九号に再録。）に詳しい。

このように見てくると、中華人民共和国にあつて梵鐘研究の中心は大鐘寺古鐘博物館にあることが理解されよう。事実、図版を中心とした大著『古鐘卷』（北京文物精粹大系 北京出版社、二〇〇〇年）、北京にある梵鐘の鐘銘の録文を中心とした大鐘寺古鐘博物館編『北京古鐘』上・下（北京燕山出版社、二〇〇六年）は古鐘博物館関係者による刊行物であり、これらによって北京関係の梵鐘の詳細が知られるようになり、誠に喜ばしいことである。筆者は以前、古鐘博物館蔵鐘のかなりの部分を撮影し、鐘銘を積文することを意図したが、これら書物によって資料はほぼ示されたことになり、筆者には朗報であった。

また大鐘寺に関わる著作としては大鐘寺古鐘博物館編『古刹梵鐘』（中国農業科技出版社、一九九八年）、大鐘寺古鐘博物館編『大鐘寺古鐘博物館建館二十周年紀念文集』（北京出版社・天津出版社、二〇〇一年）があり、同博物館の編著としては『中国古鐘伝説故事』（北京・天津出版社、二〇〇三年）がある。

この他、梵鐘に関する研究書としては于弢『中国古鐘史話』（中国旅游出版社、一九九九年）、庾華『鐘鈴象徴文化論』（遼寧民族出版社、二〇〇四年）があり、著者はともに大鐘寺古鐘博物館に關係する研究者である。また一般むけの書物としては朱英麗・曾貽萱『北京鐘鼓樓』（北京美術摄影出版社、二〇〇三年）、于弢『歴代詠鐘対聯精選』（農村读物出版社、二〇〇四年）といったものも刊行されるようになった。³⁾

次に近年の日本での支那鐘の研究について記しておきたい。『梵鐘』誌の「関係文献紹介」欄にあげられたものを中心に関係論文をあげると以下のようなものがある。

・大熊恒靖「中国鐘の音―中国鐘と和鐘の音の特徴―」（『梵鐘』第五

号、平成八年十月)

・石田 肇「河北省宣化県の清遠楼と鐘」(『梵鐘』第八号、平成十年四月)

・大鳥居総夫「中国鐘見学記」(『梵鐘』第十号、平成十一年五月)

・神崎 勝「中国鐘の分類について」(『梵鐘』第十二号、平成十二年十月)

・全 錦雲(神崎勝訳)「中国鐘の変遷とその歴史的背景」(『梵鐘』第十三号、平成十三年十一月)

・斉藤善夫「支那禅刹図式」の中の何山寺鐘」(『史迹と美術』第七三五号、平成十五年六月。同『梵鐘探求余滴』所収、同頒布会、平成十九年。)

・全 錦雲(石田肇訳)「中日梵鐘の比較研究」(『梵鐘』第二十号、平成十九年十月)

・神崎 勝「中国鐘の変遷と地域的特色」(『立命館大学考古学論集』V、平成二十二年五月)

このように見ると、支那鐘にかかわる関係文献は量的にはきわめて少ない、という印象である。また朝鮮鐘の研究蓄積に比べても少ないのである。朝鮮鐘に見られる飛天像などは和鐘にも反映させた例が多くあること、あるいは朝鮮鐘の模鐘、また和鐘と朝鮮鐘を混淆させた作例が多いことから理解できるように、日本では朝鮮鐘への関心は支那鐘に比べると高いといえよう。このような事実からすれば支那鐘への関心が低いことは肯われるのではあるが、一方で黄檗宗を中心に支那鐘の影響を受けた作例が存在することが指摘されている。ここでは斉藤善夫氏の以下の一連の論文をあげておきたい。

・斉藤善夫「高岡山瑞龍寺の模造支那鐘―鐘銘を中心に―」(『梵鐘』第五号、平成八年十月。同『富山・石川 梵鐘考』所収、北陸石仏の会、平成十年。『梵鐘研究余滴』所収。)

・斉藤善夫「瑞龍寺の模造支那鐘文様種型」(『大境』第一八号、平成

八年)

・斉藤善夫「隠元隆琦撰銘の梵鐘」(『黄檗文化』第一一九号、平成十二年五月。『梵鐘研究余滴』所収。)

・斉藤善夫「撰津仏眼寺鐘の祖形」(『梵鐘』第十六号、平成十五年十月。『梵鐘探求余滴』所収。)

・斉藤善夫「隠元・黄檗に係る梵鐘の形状と文様について」(『黄檗文化』第一二三号、平成十六年七月。『梵鐘研究余滴』所収。)

江戸時代に支那鐘の影響を受けた作例があることは周知のことであり、これからそれら作例が知られることにはなるであろうが、第二次大戦中の金属供出により多くの梵鐘が失われており、失われた中には支那鐘の影響を受けたものもあつたであろうことは推測されよう。^④

以上のような具合で、支那鐘への言及は少ないのではあるが、後述のように日本に関わる支那鐘の知見は今後ふえる可能性があり、日本現存の支那鐘ならびに支那鐘に関連する研究はより深化して行くであろう。

三

前掲拙稿で日本に現存する支那鐘を報告したが、その後、現在のところ、

〈日本現存支那鐘〉有紀年四口(内一口は骨董店所有)。

〈日本現存支那鐘〉無紀年一口。

〈佚亡鐘〉一口。

を知り得た。この他に、〈現所在不明鐘〉が数口あるが、これらは現在のところ所在不明のもので、骨董店で売られてしまったものなどである。詳しいデータは未詳であるが、これらのなかには元代のものと思われるものもある。

一方、道観などに新鑄され輸入された例が知られ、これらは現段階

皇帝萬歲	嘉靖二十九年 二月吉日造 金火匠人高懷秀 送鍾人高友倉	弟楊中和 王 氏 妻武氏 楊魁妻 薛氏 錫 氏 男 楊根鎖 陰 [○] 補楊滿 [○] 妻劉 [○] 氏 楊彬濟妻穆氏 楊希仁妻王氏	≡ ○	≡ ○	≡ ○	≡ ○	≡ ○
------	--------------------------------------	--	--------	--------	--------	--------	--------

⑤ 鉄鐘で笠形に穴四つ、下縁は八葉で、各葉に八卦紋と小さな撞座あり。

⑥ 店主によると近年に北京からの輸入という。

⑧ 平成十五年二月十日、同十九年二月六日。

⑨ 本鐘の存在は鈴木勉氏の教示による。本鐘は山西省太原府にあったものである。

	位	南	無
寶國祥 常國□	趙 [○] 之□ 張文州 張蕭貴	高望 高廷□ 高□海? □□□ 李 治	南瞻部洲 大清國京都順天府東安 [?] 司□□□城北北禺村□□ 業善人 石天祥 李秀發 張昌倍? 石仲廣
寶國瑤 康 慶	史成風 高連城?	邵□溥 □□□ □□□ 高文秀	
	≡		≡

補遺3 老子製作所鐘 乾隆十三年（一七四八）〔図4〕
 ① 富山県高岡市戸出栄町
 ② 乾隆十三年八月吉日
 ③ 総高八三・六 龍頭高一六・五 口径六四
 ④ 池の間四区に陽鑄の銘文あり。笠形に「南無衛妙音菩薩之位」と逆時計回りに陽鑄されている。本鐘は鉄鐘でかつ屋外にあったため錆がひどく、鐘銘には積文できない部分かなりがある。

音	菩	薩	之
魯運昌 脚河 劉成先 平殷 楊文廣 京都 王大用 張□ 王進才 深洲		□ 林之茂 高□ 高得平 高千 高廷佐 高存智 寶□□	趙安周 石天良 石天棟 石天印 高廷学 高廷佑 高万 史進孝 林仲□ 石天俊
≡	≡	≡	≡

- ⑤ 鉄鐘である。上帯に四つの穴、蓮弁は八。下帯に八卦紋。下縁は八葉。撞座なし。亀裂が二本ある。
 - ⑥ 舶載の経緯は不明であるが、数十年前から老子製作所にあるといわれる。同製作所は梵鐘などの仏具の鑄造で知られる。
 - ⑦ 斉藤善夫「梵鐘流転（一〇）」（『富山史壇』第一五九号、平成二十一年七月）。
 - ⑧ 平成二十二年七月十四日。
 - ⑨ 本鐘の存在は斉藤善夫氏の教示による。鐘銘によると本鐘は北京順天府東安県にあったものである。
- 補遺 4 個人蔵 咸豊年間（一八五一〜六一）〔図5〕
- ① 個人蔵
- ② 大清咸□ 十月

衛	妙
乾隆拾三年八月吉日 造	住持僧 普安 嘔? 徒理 來
≡	≡

③ 総高五六 龍頭高八 口径五六
 ④ 本鐘は鉄鐘で保存状態がかなり悪く、池の間四区の上部に二字づつ「国太・民安・風調・雨順」の定型句が陽鑄され、またわずかに陽鑄の文字が判読される。

順	雨	調	風	安	民	太	国
	□□□□	大清成□□□□ 十月吉	□□□□ 文□□□				

⑤ 鉄鐘。笠形に穴四つ。下縁は八葉、各々に瓢箪状の模様を陽鑄され

ている。

⑥ 日本への舶載の経緯は不明。骨董商からの購入。
 ⑧ 平成二十一年三月四日、福井卓蔵氏同行。同二十二年五月十一日、大熊恒靖氏・福井卓蔵氏同行。
 ⑨ 本鐘の存在は福井卓蔵氏の教示による。清の咸豊年間のものである。
 補遺5 個人蔵 無紀年 [図6]

① 個人蔵

② 総高二・九 龍頭高三・六 口径一四・七

④ 無銘

⑥ 鐘身頂部に穴、上帯は蓮弁八、上部池の間四区、下部池の間四区、下縁は八葉でそれぞれに撞座あり。

⑦ 日本への舶載の経緯は不明。骨董商からの購入。茶室などの喚鐘として使用されていた模様。

⑧ 平成二十二年五月十五日。

⑨ 本鐘のような小形の鐘は日本にもいくつかあるが（前掲「日本現存支那鐘銘集成稿（下）」に挙げた30の長楽寺鐘、無紀年2鐘など）、前掲『古鐘巻』にも北京の小形鐘が紹介されており、本鐘と同じくそれらは無銘である。日本の半鐘と同じように、このような無銘のものは余った湯（金属）で鑄造した物であろう。

〈失鐘〉 [図7]

長崎県の対馬には、その地理的位置を反映して様々な梵鐘があったことが知られる。それらは和鐘、朝鮮鐘、和鮮混淆型式鐘、韓支混淆型式鐘、模造朝鮮鐘であり、失亡してしまった支那鐘である。この支那鐘は『対馬紀事』附録巻二に見える[図7]のようなかたちの仁位村（現豊玉町仁位）の天神宮鐘であり、総高一尺五寸、口径一尺、六稜鐘つまり下縁は六葉であった。

〈現所在不明鐘〉 [図8]

現在、所在が不明の支那鐘が数口あり、いずれも骨董店で売られて

いたものである。筆者が目にしたもの、あるいは教示されたものをあげると、まずある骨董店では総高二〇cm前後の明の成化年間（一四六五〜八七）と清の乾隆年間（一七三六〜九五）のものを見たし、この店では以前も小形の支那鐘を売ったといい、その写真を見せてもらった。これらは愛玩用あるいは喚鐘用である。前記無紀年個人蔵の小形鐘と同様であろう。この骨董店の経営者によると、それらのなかには北京の潘家園旧貨市場や瑠璃廠の海王村で仕入れたものがあるという。

また某氏の教示によると、某骨董店では〔図8〕のような鐘が売られていたという。詳しいデータは不明であるが、店によると元代のものといい、鐘身頂部に穴があり、上帯に当たる部分に穴が四つ、下縁は八葉でそれぞれに八卦紋が陰刻されている。

〈調査対象外〉〔図9〜10〕

調査対象外のものをも本稿で取りあげるのは矛盾しているが、ここでは近年に鑄造された支那鐘を取りあげることにした。それらは中国に発注して道観などに新しく鑄造されたものである。現段階ではこれらは歴史的には価値はないと思われるが、日本から梵鐘が輸出された例があったり、引き合いがあったりする現状では、調査対象外として近年の梵鐘をあげておくことは意義があるであろう。

日本にもいわゆる道観はいくつかあるが、近年に建立されたそれらには鼓楼と対に鐘楼があり、そこには鐘が掛けられている。二十数年前、神戸の関帝廟をみた折には、そこにあつた鐘は和鐘であつたが、現在はどうかであろうか。一九九五年に開廟した埼玉県坂戸市の聖天宮では一九八五年に鼓楼と鐘楼が着工されており、筆者は鐘楼の鐘を見てはいないが支那鐘であると聞いている。また二〇〇六年に建立された横浜中華街の媽祖廟の鐘楼には支那鐘が掛けられている。このようなこともあつて、すぐ近くの関帝廟にも鐘楼を造る計画があると仄聞している。

日本の寺院で支那鐘を発注した例はいくつかあるようだが、ここでは群馬県甘楽郡下仁田町の靈山寺の支那鐘をあげておきたい。⁷⁾これは〔図9〕のようなものであり平成十一年の完成で、上海交通大学教授の盛宗毅の設計監修、中華青銅文化復興公司の鑄造である。

日本で鑄造した支那鐘の意匠の例を二例あげておきたい。長野県上高井郡小布施町の岩松院は葛飾北斎の天井絵で知られるが、鈴木勉氏の教示によると、本堂の殿鐘は〔図10〕のように支那鐘の意匠である。鐘銘によると、平成六年の鑄造で、制作者は上海交通大学の中国芸術研究所の盛宗毅教授で、足利市の鑄匠鴛田力がかかわっている。住職によると実際の制作は高岡の老子製作所であるという。日本での鑄造であるためか細部には和鐘の雰囲気があるように感じられる。

また筆者未見ではあるが、老子製作所によると兵庫県加東市秋津の寿福寺の鐘は老子製作所の鑄造で、支那鐘の意匠であるという。

〈参考例〉〔図11〕

支那鐘といわれるが、筆者にははたしてそうか確信の持てないものがある。小稿では参考例として取りあげたい。それは広島県竹原市下野町の宝泉寺の鐘である。久保昭登『安藝竹原 寶泉寺』（平成十一年著者刊）によると、明治三十五年頃、持ち込まれたといわれ、久保は竹原の照蓮寺に支那鐘が蔵されていることを指摘している。この鐘は〔図11〕のようなものであり、総高七二、龍頭高一二、口径四九・五という大きさで無銘である。鐘身頂部に穴があり、下縁は六葉で一見して照蓮寺の支那鐘とよく似ており、大きさも鐘身はほぼ同じである。但し、照蓮寺鐘の上帯は十二の蓮弁であるのに対して寶泉寺鐘は唐草文様であり、寶泉寺鐘の龍頭は和鐘のそれに近い。寶泉寺にはこの鐘に関する記録は一切なく、その伝来の経緯などは不明である。筆者としては、その大きさと意匠からしておそらくは照蓮寺鐘を模したのではないかと推測している。照蓮寺鐘については前掲拙稿「日本現存支那鐘銘集成稿（下）」の28照蓮寺鐘参照。

四

以上、前掲拙稿を補うために補遺を報告した。古代出雲歴史博物館鐘や老子製作所鐘のように新たに知られるようになった支那鐘がある以上、今後も新たなものが知られる可能性があるといえよう。また某骨董店鐘や個人蔵鐘のように骨董店が介在しているものや、また現在不明鐘で記したように骨董市場で流通していたものがあるといえよう。この他、調査対象外として近年に铸造輸入されたものや日本で铸造された支那鐘の意匠のもの等がある。

前掲拙稿を発表してから十年餘、近年に铸造されたもの以外に十口近い支那鐘の存在を確認することができた。今後、新たに知られるものがあるであろうし、日本に輸入されたり、日本で支那鐘の意匠の鐘が铸造される可能性もある。いずれまた小稿の続編を報告する必要があるであろう。支那鐘にかかわる情報を教示いただければ幸いである。

〈註〉

- (1) 日本古鐘研究会は『梵鐘』第二十号の刊行をもって実質的に休会の状況になった。関心のある向きは副会長であった筆者にご連絡いただきたい。
- (2) 日本古鐘研究会会長であった撫石庵真鍋孝志氏のコレクションである。立正大学学園から『撫石庵コレクション考古資料図録』(平成十二年)、『同II』(平成十三年)、『同III』(平成二十一年)が刊行されており、支那鐘に関してはII・IIIで取りあげられている。これら支那鐘は前掲拙稿では個人蔵としてあげたが、当時は高知市の故岡本文雄氏の所蔵であった。
- (3) これら古鐘博物館関係出版物について筆者は『梵鐘』第十七号・十八号・二十号で書評・紹介した。
- (4) 齊藤氏があげていない例を一例あげると、鳥取県八頭郡八東町の長源寺には延享五年在銘の八葉鐘がある。有福友好『梵鐘』(昭和五十六年)参照。また森徳一郎『亡鐘遺響』(昭和四一年)によると、愛知県碧南郡知立町牛田の泉倉寺には元禄九年在銘の八葉鐘があったが戦時供出されたという。

(5) 台北県金山郷の法鼓山に平成十八年、中華民国最大の鐘である法華鐘が老子製作所から納品された。また同製作所には中華人民共和国からも引き合いがあるという。

(6) 拙稿「対馬の朝鮮鐘にかかわる新資料」(『梵鐘』第十三号、平成十三年十一月)、拙稿「在日本の各種型式的古鐘」(前掲『首届北京国際古鐘文化交流研学会資料匯編』所収)参照。

(7) 本鐘の存在は山口幸男氏の教示による。本田美穂他「郷土サウンドスケープに関する社会科地域調査―下仁田の夏の場合―」(『群馬大学社会科教育論集』第十号、平成十三年三月)参照。

〈附記〉

小稿を報告するにあたっては所蔵者、管理者、管理機関の各位に御世話になった。記して感謝したい。

(庚寅九月十日 稿)

(平成二十二年九月二十四日受理)



图2 同上段第1区拓本



图1 古代出雲歴史博物館鐘



图4 老子製作所鐘



图3 某骨董店鐘

図6 個人蔵



図5 個人蔵



図8 某骨董店蔵



図7 仁位村天神宮鐘

長一尺五寸鐘口六稜所殺入一寸三分鐘銑徑一尺厚七分六方陽識如圖物

仁位村天神宮鐘圖

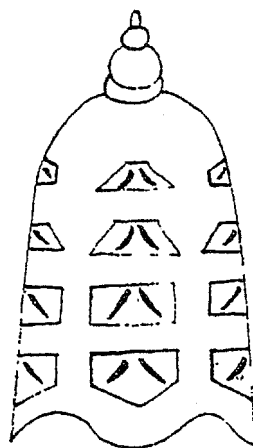




图10 岩松院鐘

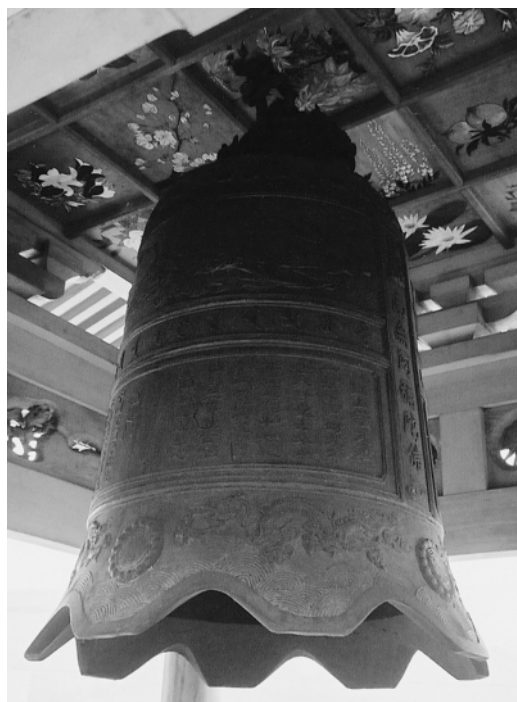


图9 靈山寺鐘



图11 宝泉寺鐘